

22. 虚血性心疾患を有する維持透析患者の予後について

獨協医科大学循環器内科

石村公彦, 森 陽祐, 中野滋文, 吉田康太郎, 矢部彰久, 堀中繁夫, 松岡博昭

【目的】 当院において維持透析患者における虚血性心疾患の治療別予後について検討した。

【方法】 1993年から2003年までに冠動脈造影にて虚血性心疾患と診断され、当院入院となった連続92症例の維持透析患者について、薬物治療群 (M群), PCI群 (P群), CABG群 (ope群) の3群間に分けて比較検討を行った。

【結果】 各3群間の症例数は、M群16例、P群34例、ope群42例であり、平均年齢は、M群59.0歳、P群60.8歳、ope群57.9歳であった。病変枝数としては、M群は1VD (43%), 2VD (37.5%), LMT or 3VD (18.8%), P群は1VD (44.1%), 2VD (26.4%), LMT or 3VD (29.4%), ope群は1VD (5.2%), 2VD (42.1%), LMT or 3VD (52.6%) の割合でope群に重症病変が多かった。冠動脈造影から死亡するまでの平均期間はM群1.2年、P群が2.2年、ope群が5.1年であり、ope群で最も予後良好であった。一方で冠動脈造影を施行するまでの平均透析歴をみるとM群は5.6年、P群は7.5年、ope群は3.6年であり、ope群が最短であった。さらに冠動脈造影で有意狭窄のなかった患者の死亡までの平均透析歴は11.5年であり、同様にM群は6.8年、P群は9.7年、ope群は8.8年であった。

【結語】 虚血性心疾患を有する維持透析患者の予後としては、ope群が最も良好であった。しかし、ope群では術前透析歴が短く、P群においては透析歴が長期間であった。維持透析患者における血行再建術は薬物治療群に比べ有益であると考えられた。

23. 肺高血圧症に対するクエン酸シルデナフィル投与の臨床的検討

内科学 (心血管・肺)

原澤 寛, 布施大輔, 天野裕久, 松田俊哉, 小田和彦, 有川拓男, 中元隆明, 金子 昇

【目的】 肺高血圧症は右心不全や呼吸不全をきたし予後不良の疾患である。クエン酸シルデナフィルを投与し臨床症状の改善を認めた2例を報告する。

【対象・方法】 症例1は46歳男性、胸痛と呼吸困難で入院、慢性肺血栓塞栓症の診断で治療後も症状が改善せず、シルデナフィルを併用した。症例2は41歳女性、労作時呼吸困難で入院。原発性肺高血圧症の診断でエポプロステノール導入後も失神発作が出現したためシルデナフィルを併用した。

【結果】 本薬剤投与後、2例ともに肺動脈平均圧や全肺血管抵抗は低下し、6分間歩行試験による運動耐容能は改善した。

【結論】 シルデナフィルは肺血行動態を改善する可能性がある。